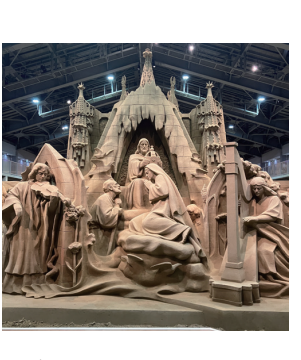
第17期展示
砂で世界旅行・スペイン

1．聖母の戴冠　サグラダ・ファミリア降誕のファサード
スラヴァ・ボレツキ（ポーランド）



2026年6月に没後100年の節目を迎えるスペインの天才建築家アントニ・ガウディ。代表作「サグラダ・ファミリア」はガウディが生涯を捧げた未完の教会建築で、1882 年の着工から今なお140年以上建設が続いています。教会には現在2つのファサードが完成しており、本展ではキリストの生誕物語を題材とした「降誕のファサード」を表現しています。本作は、ファサード中央の「愛徳の扉口」の彫刻群から 3 体を再構成して造形しています。扉口の頂点に配置されている「聖母の戴冠」は被昇天した聖母マリアがキリストから冠を授けられる場面です。キリストを祝福する楽天使たちは、古典音楽の象徴バイオリン、宗教音楽の象徴ハープを奏でます。

2．闘牛
ワン・ジエ（中国）

スペインの国技でもある闘牛は中世の貴族が馬に乗って牛を突く騎馬闘牛に始まり、その後 18 世紀に徒歩の闘牛士が主役となる現在の形式へと発展しました。その中心に立つのが牛にとどめを刺す花形的存在のマタドール（正闘牛士）です。彼らは金糸を施した豪華な正装を身にまとい、赤い布を巧みに操って牛の動きを引き出しながら華麗で緊張感あふれる技を披露します。観客はその一瞬の駆け引きに魅了され、長く国民的娯楽として親しまれてきました。一方で近年は動物愛護の観点から地域によっては禁止や規模縮小の動きも見られ、闘牛は大きな転換期を迎えています。

3．スペインの文学『ドン・キホーテ』
オスカー・ロドリゲス（スペイン）

1605年に出版されたミゲル・デ・セルバンテスの小説『ドン・キホーテ』。「騎士道物語」に影響され自らを騎士と思い込んだ老人がドン・キホーテと名乗って世直しの旅に出るストーリーです。

砂像では、主人公が物語に没頭するあまり正気を失っていく様子や風車を巨人と思い込んで戦いを挑む有名なシーンなどを制作しています。従者サンチョ・パンサは現実的な視点で支えながら行動を共にしました。二人の旅を通して、人間の理想と現実の対立や夢を追うことの尊さと滑稽さが描かれたこの物語は高く評価され世界中で愛されています。

4．西ゴート王国
バグラト・ステパニャン（アルメニア）

5 世紀～ 8 世紀にイベリア半島を支配した西ゴート王国。

手前の人物は、6 世紀後半に勢力拡大と王権強化につとめた国王レオヴィギルド。右奥は、その息子ヘルメネギルドが反乱の末に捕らえられる場面です。自らカトリックに改宗し、アリウス派の父王に挙兵した王子の悲劇的な最期と、威厳ある王の肖像が対比的に構成されています。次の王レカレド 1 世は国のカトリック改宗を成して教会との結びつきを強め、西ゴート王国は後のスペイン王国の原型といわれています。

作品の背景には、古代ローマの水道橋とバシリカ様式の教会が構成されています。

5．サグラダ・ファミリア
レオナルド・ウゴリニ（イタリア）

本作では、サグラダ・ファミリア「降誕のファサード」の全景を造形し、扉口の装飾や細部まで緻密に再現しています。

2026 年 2 月にメインタワー「イエス・キリストの塔」が完成し、高さ 172.5mにおよぶタワーの頂部に、高さ約 17mの十字架が設置され世界一高い教会となりました。

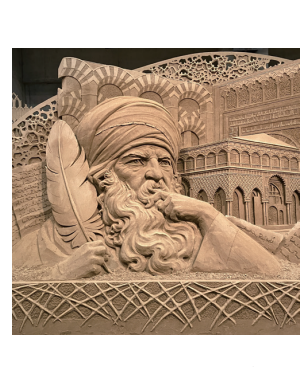
1925 年に最初の鐘塔が完成すると、ガウディは「大地と天が結ばれるようだ」と喜んだと伝わります。翌年にガウディが亡くなると、以降、キリスト十二使徒を表す 4 本の鐘塔が 1930 年に完成し、イエスの塔を囲む 4 本の「福音史家の塔」は 2023 年に完成しました。宗教と自然と建築を融合させたガウディの集大成であり、創造の源泉ともいえる壮大な建築です。

6．ガウディの建築－カサ・ミラ／カサ・バッリョ
モンセラート・クエスタ（スペイン）

スペイン語で「家」を意味する「casa(カサ)」。本作は、19 世紀末～ 20 世紀に起こったバルセロナのモダニズムを象徴する邸宅建築を主題にしています。

右は 1912 年に完成した「カサ・ミラ」。有機的な曲線は地中海の波やガウディの生まれたカタルーニャ地方の雪山をイメージしており、「ラ・ペドレラ（採石場）」とも呼ばれます。中央は、1877 年に建設され、1904 年～ 1906 年にガウディが改装した「カサ・バッリョ」。波打つ外観と骨のような柱が特徴で、外壁にトレンカディスと呼ばれる破砕タイルが施されます。同時代の建築家ジョゼップ・プッチ・イ・カダファルクによる、直線的な切妻屋根が特徴の「カサ・アマトリェール」も左奥に造形されます。

7．アル・アンダルス
イリヤ・フィリモンツェフ（ロシア）



イスラム勢力が西ゴート王国を破ってイベリア半島に侵入した 711 年以降、半島の大半を占めるその支配地域はアル・アンダルスと呼ばれました。10 世紀頃の首都コルドバは西ヨーロッパ屈指の大都市として栄え、世界の文献がここに集約されヨーロッパに流布するなど、学問の都でもありました。

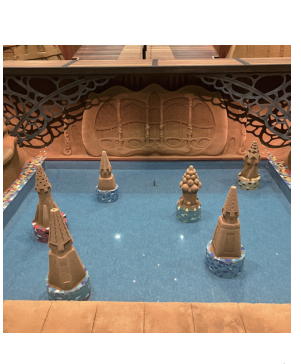
作品では、アリストテレス哲学を注釈してイスラム教と調和させ、後のヨーロッパ哲学に大きな影響を与えた哲学者イブン・ルシュドの肖像と、背景には赤白のアーチと円柱が立ち並ぶ巨大モスクのメスキータを制作。砂をくり抜く技術を多用した繊細で美しい細工も見所です。

8．コロンブス-スペイン両王への謁見
デビッド・ドゥシャーム（カナダ）

イタリア出身の航海者クリストファー・コロンブス。15 世紀後半ヨーロッパの国々は東洋から香辛料や絹などを手に入れるための新航路の発見を目指していました。1492 年コロンブスはスペイン両王（フェルナンド王とイサベル女王）に謁見。両王は国のさらなる発展にはアジアとの貿易や領土拡大が必要と考え支援を決めました。

同年コロンブスは 3 隻の船で大西洋への航海に出発し、苦難の末バハマ諸島に到達しました。西回り航路を開拓したことをきっかけに大航海時代が本格化し、歴史は大きく動いていきました。

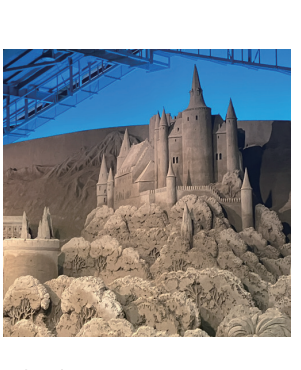
9．ガウディの建築－モデルニスモ
トーマス・クォート（アメリカ）
ジル・ハリス（アメリカ）



「モデルニスモ」は 19 世紀末～ 20 世紀のバルセロナで発展した新しい芸術様式で、自然の形を重視し曲線や色彩豊かな装飾を用いた建築が誕生しました。ガウディを代表格に、機能と芸術を結びつけて都市景観にも大きな影響を与えました。また、ガウディはスペイン各地に残るイスラム建築の影響を受けており、タイルや幾何学模様などのデザイン取り入れました。

本作では、モデルニスモ装飾とイスラム建築の意匠を向かい合わせに構成し、中央を「グエル別邸」の個性的な屋上煙突や、「グエル公園」の曲線ベンチの造形でつなぐように融合させ、ガウディの作品世界を表現しています。

10. スペインの風景
－アルハンブラ宮殿とアルカサル（セゴビア）
アンゲフォン・ディビット（ベルギー）

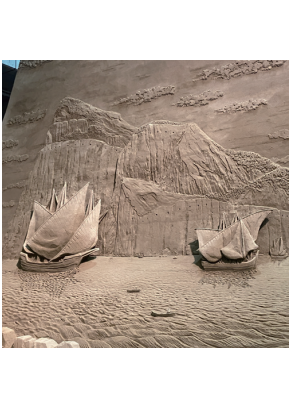


多様な歴史と文化が生み出した美しい建築が残されているスペイン。作品左は南部グラナダにあるアルハンブラ宮殿です。13 世紀にスペイン最後のイスラム王朝であるナスル朝によって建築が始まり、歴代の王による増改築で広大な城塞都市へと発展しました。軍事拠点としての堅牢な外観とは対照的に、内部には彫刻や水路など「地上の楽園」を具現化したような繊細かつ贅沢な空間が広がり、中世イスラム文化の栄華を象徴します。

作品右の尖った屋根がどこかおとぎ話の世界を思わせる城は、スペイン中央部の古都セゴビアのアルカサル。イサベル 1 世が即位を宣言した歴史的舞台でもあります。作品右端の１２角の塔は南部セビリアにあるかつての監視塔トーレ・デル・オロ（黄金の塔）です。この作品ではイスラム教文化とキリスト教文化という２つの象徴をひとつの作品に収め、スペインという国で誇り高い文化が形作られたことを表現しています。

11. グラナダ陥落－レコンキスタの完成
ドミトリー・クリメンコ（ロシア）

コロンブスの出航
イスラム勢力のジブラルタル上陸
大工園 望（日本）



711 年にイスラム勢力に占領されたイベリア半島をキリスト教諸国が約 800 年かけて奪還したレコンキスタ（国土回復運動）。北部に退いていたキリスト教徒が蜂起し徐々に勢力を拡大して南下したことに始まります。物語の幕引きとなる 1492 年のグラナダ陥落では、カスティーリャ女王イサベルとアラゴン王フェルナンドらによって強固な城壁に守られたアルハンブラ宮殿が包囲され、ナスル朝最後の王ボアブディルが降伏してレコンキスタは完成しました。

作品では、アルハンブラ宮殿の鍵を差し出すボアブディルと馬に乗り威厳に満ちた表情のイサベル女王とフェルナンド王が作られ、迫力と臨場感に満ちています。また、右にはレコンキスタ後の「コロンブスの出航」、左に「イスラム勢力のジブラルタル上陸」の場面を象徴的に制作し、海から始まるスペインの衰退と未来の繁栄を示唆しています。

12. スペイン帝国黄金期
－フィリピン入植
ドナタス・モッカス（リトアニア）

コロンブスのバハマ諸島到達以降、スペインは 16 世紀後半のフェリペ 2 世の治世で黄金期を迎えました。アフリカ、アメリカ大陸からアジアに植民地支配を広げ「太陽の沈まぬ帝国」といわれています。1571 年に総督府を設置したマニラはその後スペイン帝国におけるアジア交易の拠点として急速に発展しました。また、植民地支配と並行してカトリックの布教にも力を入れ、宣教師を各地に派遣して先住民の改宗を進めました。

フィリピンの国名はフェリペ 2 世に由来し、現在でもアジア最大のカトリック国として言語や建築などスペインの文化が色濃く残っています。

13. イベリア半島の動物
イネス・ヴァルテーレ（ラトビア）

四方を海で囲まれ、北はフランス国境のピレネー山脈、南はジブラルタル海峡でアフリカ大陸と隔てられたイベリア半島。乾いた大地と険しい山岳、地中海沿岸の湿地、広大な平原を有する多様な自然環境です。

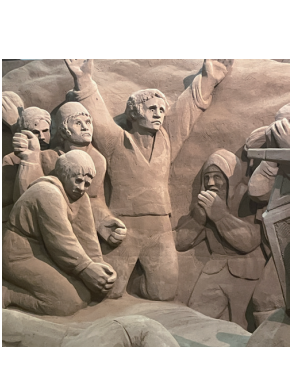
内陸の乾燥地では、絶滅危惧種でもあるイベリアオオヤマネコ、国鳥でもあるイベリアカタシロワシ、山岳地帯には太い角が特徴的なヤギの仲間スペインアイベックス、首都マドリードのシンボルでもあるヨーロッパヒグマなど、たくましく個性的な動物たちが息づいています。

14. ガウディ建築－グエル公園
セルジ・ラミレス（スペイン）

パトロンであったエウゼビ・グエル伯爵の依頼により、当初は富裕層向けの住宅地として構想された「グエル公園」。ガウディはバルセロナの地形を活かし、自然と調和する建築という理想を目指しました。グエルの死後、1922 年よりバルセロナ市の所有となり、今日まで公園として公開されています。

　本作は、公園内の主要な建築を題材にしています。左側は公園正門にある守衛の小館。おとぎ話の家のような外観は、スペインの画家サルバトール・ダリが「タルト菓子のようだ」と評したといわれています。右側には、ネオギリシャの神殿と正門大階段、中央には公園のシンボルでもあるタイル装飾のドラゴンが造形され、ガウディとグエルの壮大な夢の一端を表現しています。

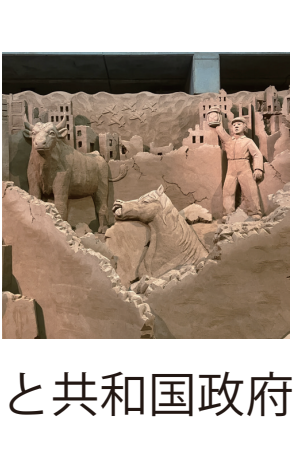
15. スペインの美術
－ゴヤ《1808 年 5 月 3 日》
ナタリア・チスチャコワ（フランス）



宮廷画家として活躍しベラスケス、エル・グレコに並ぶスペイン 3 大画家のひとりフランシスコ・デ・ゴヤ。歴史画《1808 年 5 月 3 日》は、ナポレオン軍のスペイン侵攻に対して民衆が蜂起し戦ったスペイン独立戦争の最中、軍によるマドリード市民への残虐行為が描かれます。

本作では、整然と銃を構えるフランス兵たちを手前に造形することで彫刻の立体感が増し、場の緊迫感を強調しています。左後方の両腕を大きく広げ完全に降伏している男性は犠牲と抵抗の象徴であり、十字架上のキリストを想起させます。戦争を痛切に描写したゴヤの代表作です。

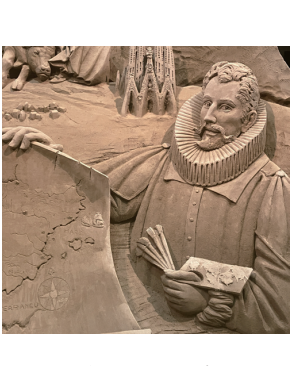
16. スペイン内戦－ゲルニカ爆撃
ギー・オリヴィエ・ドゥヴォ（カナダ）



1937 年 4 月 26 日、スペイン北部の町ゲルニカで起こったナチス・ドイツ空軍による無差別爆撃。フランコ将軍率いる反乱軍と共和国政府が対立した「スペイン内戦」中の事件でした。

スペインの画家パブロ・ピカソは同年に開催されたパリ万博で《ゲルニカ》を発表し、戦争に対する怒りを表現しました。本作では、反戦の象徴である絵画の題材を具象的に造形しています。子の屍を抱く女、暴走する牡牛や馬、一瞬にして廃墟と化した町の惨状がリアルに迫ってきます。倒れた兵士の手元にある花は、希望と再生の象徴として一筋の光をもたらしています。

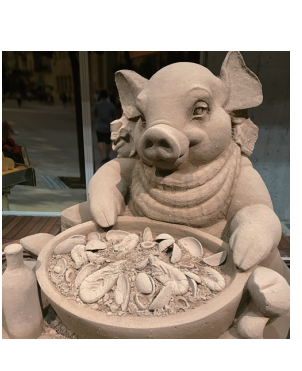
17. スペインの観光地
マテイン・ライガース（オランダ）



各地に多様な文化が根付き、豊かな表情をみせるスペインの観光地。本作は、16 世紀に活躍した画家エル・グレコの風景画《トレドの景観と地図》に着想を得て、闘牛やフラメンコ、サッカー、首都マドリードの王宮、サグラダ・ファミリアなど、スペインの古今東西の要素が大胆に盛り込まれます。

地図を広げる若者、トレドの司教・聖イルデフォンソへ祭服を授ける聖母マリアの降臨など風景画の題材も造形され、背景には古都トレドの風景が広がります。中世からキリスト教、イスラム教、ユダヤ教の文化が融合した「文化の十字路」であり、街全体がさながら歴史博物館といわれています。

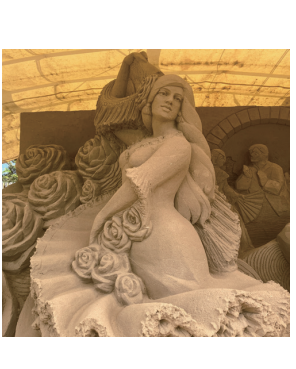
18. 美食大国スペイン
スー・マクグリュー（アメリカ）



バレンシア地方発祥の郷土料理パエリアをはじめとしたグルメもスペインの大きな魅力です。地中海域のオリーブオイル、牧草地に放牧されドングリを食べて育つイベリコ豚など、スペインの豊かな自然環境は多彩な食文化を育んでいます。

作品では、スカーフをつけたイベリコ豚の子どもが出来たての大きなパエリアをかかえ、仲間を誘っているかのよう。写実的な造形表現ながらも物語性のある愛らしい作品です。

19. スペインの芸能－フラメンコ
スー・マクグリュー（アメリカ）



スペイン南部アンダルシア地方を舞台に、ロマ族（ジプシー）の文化にアラブ、ユダヤやアンダルシアの感性が融合して生まれた伝統芸能フラメンコ。初めは虐げられた人々が心の奥底にある苦悩や情熱を吐露する「カンテ（歌）」のみでしたが、時代とともに力強い「トケ（ギター）」と情熱的な「バイレ（踊り）」が融合し、１８世紀頃現在の三位一体のスタイルが確立されました。最大の魅力は、人間の喜怒哀楽を剥き出しにする圧倒的な生命力にあります。激しい足拍子や繊細な指先の動き、歌い手と踊り手が即興で繰り広げる掛け合いは観る者の心を激しく揺さぶります。